





論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	西名 諒平
論文審査担当者	主 査		慶應義塾大学健康マネジメント研究科 教授 (看護学博士)	野末 聖香 
	副 査		慶應義塾大学健康マネジメント研究科 准教授 (看護学博士)	福田 紀子 
	副 査		慶應義塾大学健康マネジメント研究科 教授 (国際公共政策博士)	堀田 聡子 
	副 査		慶應義塾大学健康マネジメント研究科 教授 (看護学博士)	戈木クレイグヒ ル滋子 
(論文審査の要旨)				
<p>西名諒平君が提出した学位請求論文「小児集中治療室入院児と面会するきょうだいの支援」は、子どものPICU(小児集中治療室)への入室中、および退室後の親の心理状態について質問紙調査により明らかにした上で、PICUにおける医療者(看護師、Child Life Specialist(CLS)、保育士)が両親の状況をどのように捉え、入院児のきょうだいをどう支援しているか、また医療者と両親がきょうだいとどのように関わり、それはきょうだいにどう影響するのか、について観察とインタビューによる記述データの分析から明らかにした研究である。</p> <p>第1章「序論」では、PICUにおいてきょうだいの面会制限が緩和される傾向にある中、ストレスや不安を感じているきょうだいへの支援が重要であるが、医療者による支援の内容や意図および支援がきょうだいに及ぼす影響に関する研究が存在しないことを挙げ、これらの実態を明らかにするという研究の目的と意義について述べている。</p> <p>第2章(研究1)「小児集中治療室への子どもの入院が両親の心理的状態に及ぼす影響」では、PICUに入院する子どもの両親を対象とし、不安や抑うつ、心的外傷後ストレス障害(PTSD)について、入室中と退室3か月後の2時点で実施した質問紙調査の結果を提示している。調査した施設は18施設(PICU 12、ICU 6)で、入室中に237人が、退室3ヶ月後に142人が回答しており、入室中で約28%以上、退室3か月後で約15%以上の親に何らかの心理的問題が生じていることを明らかにした。2時点での変化として、入室中に心理的問題がカットオフ値を超えた親は退室後も同様であったこと、入室中は問題がなかったが退室後にカットオフ値を超えた親もいたことから、心理的問題が潜在している可能性に留意した支援が必要であると述べている。この研究の成果は、「西名諒平他:小児集中治療室入室児の両親の不安・抑うつ・PTSDの実態と経時的変化,小児保健研究, pp140-151, 2020」に掲載された。</p> <p>第3章(研究2)「小児集中治療室入院児に面会するきょうだいと両親に対する医療者の支援」では、PICU入院児にきょうだいと面会する15場面の観察と、15名の医療者(看護師9名、CLS5名、保育士1名)へのインタビューにより収集した記述データを、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析し、医療者の関わりとして【きょうだいの居場所をつくる】というカテゴリーを中心とする14のカテゴリーからなる現象を把握している。医療者がきょうだいの入院児との関わり度合や両親のきょうだいに関わる余裕などを査定しながら、「きょうだいと入院児をつなぐ」「きょうだいと両親をつなぐ」という働きかけを行い、「両親によるきょうだいの体験の共有」により「きょうだいと入院児を含めた家族の一体感」が生じているというプロセスを現象として導き出した。そして家族の一体感につながる支援の重要性や居場所づくりのための働きかけ、居場所を作るための環境づくりの重要性に言及している。この研究の成果は、「西名諒平他:きょうだいの居場所をつくる:小児集中治療室入院児と面会するきょうだいへの支援,日本看護科学会誌, 41, 2021」に掲載された。</p> <p>第4章(研究3)「小児集中治療室入院児に面会するきょうだいへの関わりとそれによってきょうだいに生じる変化」では、PICUでの面会における医療者と両親のきょうだいへの関わりときょうだいの変化について、15場</p>				

面の観察および9名の親（5名の母親と2組の両親）へのインタビューにより収集したデータを分析し、【きょうだいを主役にする】というカテゴリーを中心とする13のカテゴリーからなる現象を導き出している。両親と医療者が、《入院児との関わりの促し》《きょうだいが過ごしやすい環境づくり》《入院児への関心につながる関わり》《入院児に触れるきっかけづくり》をし、《入院児を身近に感じている様子のきょうだい》という変化につながっていること、両親が適切に関わることができない場合には医療者がそれを補う援助をしていることなどを見出した。この研究の成果は、「西名諒平, 戈木クレイグヒル滋子: きょうだいを主役にする-小児集中治療室入室児と面会するきょうだいへの働きかけ, 日本看護科学会誌, 37, 2017」に掲載された。

第5章「総括」では、PICU入院児との面会の場は、《きょうだいと入院児を含めた家族の一体感》のある場となり得ること、《入院児を身近に感じている様子のきょうだい》というきょうだいの前向きな変化につながる支援の場となることを示し、単にきょうだいを面会させるのではなく、医療者がきょうだいと両親の双方に目を配りながら支援することの重要性について記述している。

審査における主な指摘点や質疑内容は以下の通りである。

1) 3つの研究の関連性が不明瞭である。研究1で両親の精神状態と属性との関連について分析することで、研究1の結果を研究2、3の観察やインタビューの内容および考察に生かしたのではないか。また研究2、3で同じような現象を見ている部分があり、類似する結果も見られるため、研究2、3の関連と結果の統合についてどのように考えるかという質問があった。これに対し、研究1のデータ分析をさらに詳細にする必要がある、現段階では3つの研究の統合が行われていないことは課題であり、今後面会の場に限らず両親やきょうだいの体験をより広く捉える必要がある、などの回答がなされた。

2) 研究1について、PCL-S (PTSDを測定) を尺度としているが測定時期から考えるとASD (急性ストレス障害) を測定することが妥当ではないかという指摘があり、国内外で使用され信頼性妥当性が担保され、先行研究の結果と比較できること、また2時点で測定することからPCL-Sを使用した、尺度選択の理由について記述が必要であった、との回答がなされた。また調査対象者は比較的心理状態が良好な対象である可能性が高い点に言及することや、成人の患者家族を含めれば多くの研究があるので、それらと比較しながら小児の親である特徴を考察するとよいのではないか、などの意見があった。

3) 研究2、3について、コアカテゴリーの説明において具体的な関わり方を示すためにラベルを出す方がよかったのではないか、医療者の距離感の適切さについて述べている点については根拠となるデータを示す必要がある、などの指摘があった。これらについて、カテゴリーを説明する重要な概念はプロパティとして示したことが説明され、根拠となる引用データについては記述する必要があった、という回答がなされた。また研究2のコアカテゴリーである「きょうだいの居場所をつくる」、研究3のコアカテゴリーである「きょうだいを主役にする」はいずれもその文言で語られたデータ自体はなく、研究者が示したい概念の意味が伝わらない可能性があるため、他の用語を検討する余地があるのではないかという指摘があった。また居場所についての研究は他分野でいろいろあるため、それらを活用してきょうだいごとの居場所の感じ方について分析を深めることができるのではないか、親がこれらの関わりができるよう医療者が親にどう関わるかにも言及する必要がある、インタビュー内容や観察とインタビューをどのように組み合わせたのかなど研究方法に関する記述を詳述する必要がある、きょうだいの変化は観察データによるものであり根拠が弱い、などの指摘があった。

4) 第5章「総括」について、内容が3つの論文のサマリーにとどまっており、博士論文全体の考察としての深まりが不十分であるという指摘があった。例えば、調査対象とした職種による関わり方の違いや、子どもがPICUに入室することの家族に及ぼす意味などについてより深く考察できるのではないか、第1章で全体の問題構造と2～4章の意味合いを示しておくことと第5章で研究を統合し考察できるのではないか、などの指摘や助言があった。

上記のような課題はあるが、本研究は調査に慎重な配慮を要するPICUという場で段階的に実施された研究であり、本邦で初めてPICU入院児の両親の不安、抑うつ、心的外傷後ストレス障害について18の病院で調査し実

論文審査の要旨

No. 3

態を明らかにしている。さらに、きょうだいの面会場面の観察、医療者へのインタビュー、両親へのインタビューにより丁寧にデータを作って質的分析を重ね、医療者や親のきょうだいへの関わりと、それによるきょうだいの変化について 2 つの現象からそのプロセスを明らかにしており、新規性の高い価値ある論文である。以上から、審査担当者は一致して、西名諒平君に博士（看護学）の学位を授与することが適当であると判断した。